

## 令和4年度第1回仙台市協働まちづくり推進委員会 議事録

○日 時：令和4年5月25日（水）15:00～

○場 所：仙台市役所本庁舎2階 第2委員会室

○出席委員：高浦康有委員長、佐々木綾子副委員長、石田祐委員、岩間友希委員、  
加藤隆委員、小林幸司委員、佐伯恵子委員、庄子康一委員、高橋由佳委員  
傳野貞雄委員、春由美委員

○欠席委員：なし

○事務局：市民局長、市民局次長、市民活躍推進部長、市民協働推進課長、  
地域政策課長、市民活動サポートセンター長、市民活動推進係長、  
連携推進係長、他担当職員

○次第

1 開会

2 委嘱状交付

3 市民局長挨拶

4 委員紹介

5 議事

- (1) 委員長・副委員長の選任
- (2) 会議の運営について
- (3) 委員会の審議内容について
- (4) 若者が活躍するまちづくり事業について

6 その他

7 閉会

## ○会議内容

### 1 開会

[事務局（市民活動推進係長）]

ただいまから、令和4年度第1回仙台市協働まちづくり推進委員会を開会いたします。

本日、進行を務めさせていただきます市民局市民協働推進課市民活動推進係長の鈴木と申します。よろしくお願ひいたします。

初めに、当委員会の定足数を確認させていただきます。本日は11名全員にご出席をいたしておりますが、出席が過半数を超えておりますので、仙台市協働によるまちづくりの推進に関する条例施行規則第4条第2項の規定に基づき、会議は成立いたしますことをご報告申し上げます。

### 2 委嘱状交付

[事務局（市民活動推進係長）]

それでは次第に従いまして進めてまいります。次第2ということで、委員の皆様に委嘱状を交付させていただきます。市民局長が皆様のお席に伺い委嘱状をお渡しいたしますので、順番にお受け取りいただきますようお願いいたします。

（以下、石田委員、岩間委員、加藤委員、小林委員、佐伯委員、佐々木委員、庄子委員、高浦委員、高橋委員、傳野委員、春委員に市民局長から委嘱状を交付。）

### 3 局長挨拶

[事務局（市民活動推進係長）]

次に、今期の開催に当たりまして、市民局長の天野よりご挨拶を申し上げます。

[事務局（市民局長）]

皆さん、こんにちは。この4月から市民局長に就任いたしました天野と申します。

まずは、お忙しい中この委員会の委員にご就任いただきまして本当にありがとうございます。この委員会の開会に当たりまして、一言ご挨拶をさせていただきたいと思います。

この委員会は、仙台市協働によるまちづくりの推進に関する条例に基づいて設置されており、様々な調査、審議をしていただくものでございます。これまで協働まちづくり推進プラン2021などの策定に当たりましてご意見をいただきいたり、または個別に各年度の事業にご意見をいただいたりしてきたという経緯がございます。

ご専門の皆さんを前にして言うのはなんですかけれども、協働まちづくり、それから市民協働というものが非常に重要であると考えておるのですが、市民協働といいましても、団体が行う協働、市民個人として行う協働、それから企業もやはり最近はCSRとかCSVとか、そういう発想が出てきて、まちづくりに一緒にになって参加することで自社の価値を

上げるというようなことも進んでまいりましたので、いろんな見方ができるのではないかと思います。仙台市を振り返ってみると、脱スパイクタイヤ運動など先人が培ってくれた伝統があり、それをどういうふうに展開していくかということが非常に重要なと思っております。最近、これが普通ではなくて仙台の特徴であり、行政と市民との協働の垣根が低いというような研究も出てきてまいりました。私自身、ほかの自治体に災害派遣された際にそういうことを体感しているところでございます。こうした仙台の特徴、優位性を伸ばしていくにはどうしたらいいか、こういったことをこの委員会の中で話し合っていただければというふうに考えております。

その中でも少し今年度の主な課題認識を先取りしますと、仙台市の特徴の一つに学都というのがありますが、その学都というのが例えば京都、福岡と比べて仙台の特徴は一体何だろうかということを我々いつも考えているものの、なかなか答えが見いだせないです。そこで一つの仮説ですけれども、学生がまちづくりに参加する仙台だと。仙台の学生は、よくまちづくりに参加しているというようなことを仮置きできないかというのが一つあります。例えば、京都だったら非常に学間に集中する京都の学生、それから福岡だったら元気だということだけれども、仙台の学生はなぜかまちづくりによく参加しているのではないかというようなことを仮置きできないかと。また別の視点では、支店経済と若干ネガティブな感じでよく言われていますが、考えてみると、支店経済だからこそ若い人たちが会社に入って初年度や2年目、3年目に仙台に入ってくることもあります。仙台からまた転勤でいなくなってしまう場合もありますが、そうした人たちの中に、まちづくりに参加しようというような動きが最近出てきました。こうした動きをどう生かしたらいいのか。大学と支店というのは仙台をフレッシュに保っていく循環装置といったことも言えるのではないかと思います。それをどうまちづくりに生かせるのかと。もちろんまちづくりというのは若い人だけで取り組んでいくのではなくて、様々な分野で取り組んでいくことが重要ですけれども、例えば町内会と若者をどうやってつないだらいいのかというようなことも、今年度の我々のテーマにしたいと思っています。この委員会とは別の取り組みになりますが、若者や女性の貧困、孤立が問題になっておりまして、困難な状況にある人にどうやって支援の手を差し伸べられるかというか、リーチできるかということにも本市で今年は取り組んでいきます。こうしたこともあるって、全般的に今年度は市民局としては若者に特化していろいろ議論を進めたいということでございますので、ぜひ皆様からこうした観点の議論をいただければと思います。

結びになりますが、改めてお忙しいところお集まりいただきまして、そして委員にご就任いただきましたことにつきまして感謝を申し上げまして、私からの挨拶とさせていただきます。

#### 4 委員紹介

〔事務局（市民活動推進係長）〕

続きまして、委員の皆様をご紹介させていただきます。お手元の名簿をご覧いただければと思います。本日は第1回目でございますので、皆様から一言ずつご挨拶を頂戴したいと思いますので、よろしくお願ひいたします。

[石田委員]

宮城大学の石田と申します。私は前期でこの委員会に初めて参加させていただきまして、今回は2期目ということになります。仙台市の協働まちづくりという意味では、杜の伝言板ゆるるというNPO法人が宮城野区にあるのですが、みやぎNPOプラザの指定管理をしている団体でして、一昨年からそちらの代表理事もしております、そのあたりで皆さんといい議論ができたらなというふうに考えているところです。どうぞよろしくお願ひいたします。

[岩間委員]

岩間です。普段は泉区の長命ヶ丘にあるプランチ仙台というショッピングモールの中で、そちらを運営する株式会社と協働で運営をする形で、NPO法人まちづくりスポット仙台というところの現場に入っております。よく、まちづくりで使い古された言葉で、よそ者、若者、ばか者といいますが、そろそろ若者というには危ないかなぐらいの年齢のよそ者とばか者を全部網羅している者として活動しております。こういう機会で、本当に知識がいっぱいある方と同等の意見が言えるか全然分からず不安なんですけれども、現場的な意見はどんどん言えるかと思っておりますので、よろしくお願ひいたします。

[加藤委員]

長町でまちづくりをやっています一般社団法人ながまちマチキチの加藤と申します。主に長町を中心に、商店街と地域と、あと近隣の学校など、そういうたとこと連携しながら、まちづくり活動をしています。皆さんご存じのように、長町というのは比較的人もいる、お店もある、若者もいる、子供たちもいる、いろんな形である意味活性化されたまちではあるんですけども、じゃあ本当の活性、住みよいまちってどうなんだろうとか、そういうたとこに疑問を持ったときに、じゃあどんなまちがこれから必要なんだろうといったことを考えながら、今いろんな方たちとアドバイスをもらいながら進めている状態です。この場を借りていろんな情報を持ち帰って、また地域で実践したり、あと我々が今までやってきたことをここで答え合わせできるような場にできればいいなと思っていますので、よろしくお願ひいたします。

[小林委員]

みやぎ・環境とくらし・ネットワーク、略称MELONという環境団体の事務局長をやっております小林幸司です。私どもMELONは、もともとみやぎ生協が母体となって育ててきた環境

団体で、それこそ最初のお話にもあった脱スパイクタイヤ運動にも随分中心的に関わって、そのときは私はまだいなかつたのですけれども、今も仙台市の環境局とはいろんな活動をご一緒させていただいています。本期から初めての参加になるので、まちづくりという視点でどこまで有効な意見を言えるか分からぬのですけれども、何だかんだ環境活動に関しては経験が長いので、環境の視点から何らか少しでも貢献できればと思います。よろしくお願ひいたします。

[佐伯委員]

公募に応募させていただきました佐伯と申します。生まれも育ちも仙台で、泉市民だった時期もありますけれども、ずっとこの仙台の中で暮らしてまいりました。委員の募集要項を目にしまして、年齢を見て応募できるぎりぎりだなと思いました、これはこれからの中の子供たちが住みよいまちになる何か役に立てたらと思い、応募いたしました。全くの一市民の感覚になるかと思いますけれども、皆様と一緒に議論を進めるのに参加させていただき、市民の感覚というのでしょうか、それを伝えられたらいいなと思っています。よろしくお願ひいたします。

[佐々木委員]

認定NPO法人STORIAの代表理事をしております佐々木綾子と申します。STORIAは大きく二つの事業をしておりまして、困窮家庭であったり困難を抱えているご家庭の親御さんの相談支援事業と、そういったご家庭のお子さんをお預かりしてサードプレイスといったところを開設しまして、お子さんの生きる力を育む事業をやらせていただいております。この事業を進めるには、私どもやはり地域の方と連携をさせていただきながら、地域の町内会の方々と一緒にそういったサードプレイスを運営したり、大学生やたくさんのボランティアの方、社会人の方、プロボノの方々もたくさん関わってくださって、事業を皆さんと一緒に、よりよくするために進めています。今回、私はこちらの委員2期目ということで、また新しい皆様と一緒に対話を重ねて、また新しい解を見いだせたらいいなというふうに思っております。どうぞよろしくお願ひいたします。

[庄子委員]

株式会社アークコーポレーション、庄子康一と申します。本業というか会社は理美容業を経営しております。私は荒町商店街の振興組合の副理事長もやっておりまして、生まれは宮城野区の小田原出身ですけども、荒町で今活動しております。昨年、荒町子まもりプロジェクトという防犯のプロジェクトを地域の16機関で連携して立ち上げたのですが、こちらは14年前に弊社で始めた取り組みが商店街に広がり、それが商店街以外の小・中・大・学校や町内会、様々な機関と連携して取り組みを行いました。そういう取り組みが評価されて、7月の警視庁主催の北海道・東北ブロックの防犯ボランティアフォーラムでも宮

城県を代表して発表することになりましたので、そういう面でも実際現場でまちづくりに対して動いている中で感じたことを、この委員会でもお役に立てたらと思いますので、どうぞよろしくお願ひします。

[高浦委員]

東北大大学の高浦と申します。仙台にも15年ぐらい住んでおりますけれども、こちらの委員会でも第4期の委員長をさせていただいて、協働まちづくり推進プラン2021の取りまとめをさせていただいたり、また第1期で宮城大学の風見先生が委員長をされているときに、市民公益活動の促進から協働まちづくりへと、仙台の市民活動が第2ステージに入ることの委員会活動でもいろいろと参加させていただいております。宮城大学の石田先生もと一緒に杜の伝言板ゆるるの理事会に入らせてもらっておりますけれども、今期も市民活動、まちづくりの価値向上に向けて微力ながら貢献させていただければと思っております。どうぞよろしくお願ひいたします。

[高橋委員]

認定NPO法人Switchの理事長を務めています高橋由佳と申します。2期目の就任ということで、何とか今期も頑張っていきたいと思います。私は中間支援組織でもありますせんらい・みやぎNPOセンターの副代表理事を昨年から務めさせていただいておりますが、そちらでも仙台の若者の活躍する場をつくっていける事業をできないかということをこの頃協議しております。また、Switchのほうでは、困難を抱える若者の就労支援を行う団体として2011年3月からスタートしておりますが、障害のある方やひきこもりといった困難を抱えている若者の方々に対しての実習先を確保していただいたりとか、インターンシップの場をつくっていただいたりとか、様々な企業の方にたくさんご協力いただきながら、これまで11年間の間に就職者がもう何百名というふうに輩出できました。やはり仙台のまちが若者にとってダイバーシティ、エクイティ&インクルージョン、こういったまちづくりになるといいなと私自身も希望を持っております。ヤングケアラーという問題が最近多く取り上げられるようになりましたが、私どもにもそういった相談がすごく多く寄せられております。そういう意味でも、子供、若者だけではなくて、その一家庭をどうやって支えていくかというところが、町内会を含めてまちづくりの中で何か寄与できるような仕組みになるといいなというふうに思っております。どうぞよろしくお願ひいたします。

[傳野委員]

私は岩手県生まれでございますが、東京本社の一部上場の会社に勤めているときに仙台の直系子会社を見てこいということで、それ以来40年近く仙台に住まわせていただいておりますので、岩手より仙台のほうが人生の中では長いです。子供たちも全部仙台の学校にお世話になって、そういう恩返しもしたいという気持ちで推薦されて町内会長になってか

ら約20年弱になります。去年まで市の連合町内会長会会長を務めているときに、宮城県自治会連合会という組織の会長と全国自治会連合会の副会長も務めて、今は全国自治会連合会の相談役という立場で、全国の皆さんとお知り合いができたということが私の宝かなというふうに考えております。我々の町内会としては、防犯訓練、その他いろいろやることが盛りだくさんで大変だなというところもありますが、宮城大学の看護学部の40床あるベッドをいざというときには使っていいよということで西垣学長の時代に連携させてもらったり、いろんなことを経験してまいりました。今回のような若者というテーマに対しては、先ほど市民局長がおっしゃったような形で少しでもお役に立てればうれしいかなと思っております。よろしくお願ひいたします。

#### [春委員]

名簿上は部署名が仙台市社会福祉協議会の地域福祉課で止まっておりますが、ボランティア協働係で、仙台市ボランティアセンターを担当しております、春と申します。日頃から既に皆さんにはご尽力を賜っていることを、この場を借りて御礼を申し上げさせていただければと思います。ありがとうございます。本会のボランティアセンターでは、今年度までに在仙の7大学と協約を結ばせていただいておりまして、今年度も引き続き、今2大学と協約のお話を進めているところでございます。コロナ禍で、ボランティアセンターを開所しながらも、人の出入りや企画的なものが制限される状況ではあるのですが、特に今年度は学生と他大学の学生との連携や学生と企業、学生と地域との連携というような事業の展開を念頭に置きながら進めさせていただこうと思っているところです。コーディネートをするというのが今回の当センターでの本事業になっておりましたので、私自身も皆様と一緒にお話をさせていただく中でいろんなことを学ばせていただきまして、戻ってからも私を中心に連携を取りながら、まちづくりというところで社協もいろいろ多方面で連携を図っていきたいと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。

#### [事務局（市民活動推進係長）]

ありがとうございました。

次に、本日出席しております関係職員の紹介をさせていただきます。

(以下、天野市民局長、高橋市民局次長、松田市民活躍推進部長、栗原市民協働推進課長、市川地域政策課長、太田市民活動サポートセンター長、田村連携推進係長の紹介。)

### 5 議事

#### (1) 委員長・副委員長の選任

#### [事務局（市民活動推進係長）]

それでは議事に移らせていただきます。初めに、議事(1) 委員長・副委員長の選任でご

ざいます。仙台市協働によるまちづくりの推進に関する条例施行規則第3条第1項の規定により、委員長及び副委員長は委員の互選により定めることとなっておりますが、皆様からご提案はございますでしょうか。

石田委員、お願ひいたします。

[石田委員]

先ほどの自己紹介の中でもありました、この会議の初期の頃のこと、それから前期の委員長でした高浦委員に今期も委員長になっていただけすると、円滑かつ実効的に進めいくことができるのではないかと思いますが、いかがでしょうか。

[事務局（市民活動推進係長）]

ただいま高浦委員を委員長にご推薦いただきましたが、皆様いかがでしょうか。

高浦委員、いかがでしょうか。

[高浦委員]

謹んでお引き受けさせていただきます。よろしくお願いします。

[事務局（市民活動推進係長）]

それでは副委員長につきましてはいかがでしょうか。

[高浦委員]

私からよろしいでしょうか。副委員長として、前期も委員をお務めいただきました佐々木委員にお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか、皆様。

[事務局（市民活動推進係長）]

皆様、いかがでしょうか。

佐々木委員はいかがでしょうか。

[佐々木委員]

謹んでお引き受けいたします。

[事務局（市民活動推進係長）]

それでは委員長を高浦委員に、副委員長を佐々木委員にお願いしたいと存じます。ここで委員長と副委員長よりご挨拶をいただきたいと思います。

[高浦委員長]

改めまして、高浦でございます。大学では企業倫理、特に企業の公益活動というところを専門テーマとして研究教育いたしております。最近では、社会起業家、ソーシャルアントレプレナーの授業なんかも担当して、学内外をつなぐといったようなお仕事をさせていただいております。先ほど天野局長からもお話がありましたけれども、仙台の市民の市民力の高さといいますか、スパイクタイヤの廃止運動、また梅田川の浄化運動、また東日本大震災でNPO、事業者、行政が一致協力して危機を乗り越えていったというところでも、誇るべき仙台の市民活動の歴史というものがあろうかと思います。私自身は神戸出身ですけれども、高校生のときに管理教育の典型的な問題といいますか、神戸高塚高校というところで、朝、学校の先生が校門を時間だといって閉める、そこで高校生が挟まれて亡くなってしまうというような、そういう痛ましい事故がありました。私が中学校のときは丸刈り強制でしたけれども、管理教育の理不尽さをひしひしと感じて、高校では新聞部に入って社会問題の啓発をしておりました。住吉川、六甲アイランドに新交通システムを通すというときに起こった景観訴訟問題を高校生ながら取材したりというような、社会問題への意識がちょっと高いような人間であります。仙台市では2015年にそれまでの市民公益活動促進の条例が大きく変わりまして、多様な市民の参画ということで、従来、市民活動を支えていらっしゃったNPOの第一世代と呼ばれるような人たち、加藤哲夫さん含め本当に立派な大先輩がいらっしゃったわけですが、局長からのお話にありましたとおり、また今年度のテーマでもあります若者の力を生かしたまちづくりということで、若者ラボや若者アワード等の活動でも地域企業のご支援いただいておりますが、そうした事業者、企業のお力添えをいただきながら多様な人たちが市民協働の担い手になっていくという、そういう震災復興からのステージを経て新たなまちづくりのステージへ仙台が至るというところで、この委員会でも次の方向性に向けて、まちづくりのプランはできておりますけれども、その内容の充実をより図っていくところで、じっくりと議論をしていければと思っておりますので、皆さんの忌憚ないご意見等々いただければというふうに思っております。どうぞよろしくお願ひいたします。

#### [佐々木副委員長]

改めまして、佐々木綾子と申します。認定NPO法人STORIAの代表をしております。私は一般企業で約15年間勤めてまいりまして、東日本大震災がきっかけで取り残された子供の貧困という課題、そういうものが浮き彫りになったといったところを感じまして、私自身もシングルマザーとして子供2人を育ててきた中で、やはりこれは今後取り組まなければいけない課題だということを感じまして、そこからNPOのほうに転身をいたしました。協働と、一言で言うと2文字なんですが、実はとても難しい課題だということも感じております。時代も様々変わる中で、多様な価値観、それを本当に尊重すればするほど協働をしていく、一つになっていくということが難しいこともあるのかなということを感じている次第です。ただ、その問題解決一つ一つを考えると、マイナスからゼロを持っていくという

よりは、今後は価値創造、いかにプラスに価値を創造していくかというのが、これから若い世代や子供たちの未来をつくる大きな秘訣なんじゃないかなというふうに思っております。ここにいらっしゃる皆様に私も学ばせていただきながら、新たな発想の中で、仙台市で協働、そして若者たち、子供たちが支えられて活躍する場をつくるにはどうしていったらいいかということを共に考えさせていただきたいというふうに思っております。副委員長という大役を仰せつかりまして、緊張はしておりますけれども、皆様どうぞよろしくお願ひいたします。

[事務局（市民活動推進係長）]

ありがとうございました。

それでは、ここからの進行を高浦委員長にお願いいたします。

[高浦委員長]

改めまして、こちらの司会進行をさせていただきます。この議論の場というのは一つの協働の場だと思っておりますので、皆さん委員お一人お一人のご意見を反映させていただきつつ、事務局とそれこそ価値創造といったようなことで、いいものが出来上がっていけばいいなというふうに思っております。

(2)会議の運営について

(3)委員会の審議内容について

[高浦委員長]

では議事を続けてまいります。具体的な議論に入る前にルールの確認ということで(2)会議の運営について、それから(3)委員会の審議内容について、事務局からまとめてご説明をお願いいたします。

[事務局（市民活動推進課長）]

まず資料1についてご説明申し上げます。委員会の公開、非公開、議事録の作成について、お諮りさせていただきたいと存じます。この委員会は原則として公開といたしまして、傍聴席を設けて、傍聴定員は10名といたします。議事録は事務局で作成いたしまして、出席した委員の皆様にご確認いただいた後、委員長及び議事録署名委員に署名していただくことにさせていただきたいと思います。議事録の署名委員は、委員長を除いた五十音順でお願いいたします。担当委員が欠席の場合は次の順番の委員にお務めいただき、欠席された委員につきましては、その次の委員会でお願いしたいと思います。議事録の公開でございますが、市政情報センターと宮城野区、若林区及び太白区の区役所にある情報センターで閲覧に供するほか、仙台市のホームページでも公開いたします。以上の内容で当委員会を運営してまいりたいと思いますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

続きまして、議事（3）当委員会の審議内容についてご説明いたします。資料2－1をご覧ください。当委員会は、仙台市協働によるまちづくりの推進に関する条例を根拠として設置しておりますが、平成27年7月から委員の任期を2年として開催してきており、今期の委員会が第5期目となります。1期から4期までの委員会の審議経過の概要につきましては資料に記載のとおりでございます。続いて、今期の審議内容でございます。今年度は、若者が活躍するまちづくりについてをテーマに、若者のまちづくりへの参加等を促進するための本市の取り組みへのご意見のほか、その効果的な手法などについてご議論いただきたいと思っており、年4回の開催を予定しております。また来年度は、市民活動サポートセンターの今後の在り方をテーマに、現在の指定管理者の指定期間が令和6年度で満了となりますことから、次の指定管理者の選定に向かまして、施設に期待する機能やサービスについてご議論いただきたいと考えており、年3回程度の開催を考えてございます。

続きまして、資料2－2をご覧ください。この資料は、今年度の当委員会の審議のテーマである若者が活躍するまちづくりが、協働のまち仙台の実現や本市の魅力を高め、持続的な発展を支えるために重要であるということと、今年度に若者のまちづくりへの参加等をさらに推し進める新たな事業展開を検討しなければならない理由などをご説明しているものでございます。これまで本市では、若者が活躍するまちづくり事業として、後ほどご説明申し上げます各種の取り組みを進めてまいりました。その一方で、コロナ禍を契機といたしまして、学校生活や働き方、ライフスタイルの変化は、若者にとりまして新しいことに挑戦しようとするポジティブな変化をもたらしておりまして、この機を逸しないよう新たな施策を検討し、そして仙台のまちが、若者が多い京都市や福岡市と比べてもまちづくりに活躍する若者の姿でにぎわって、全国の若者からも選ばれる、若者の活力に満ちたまちづくりを目指していきたいと考えておるところでございます。ここで補足ですが、資料中に用いております「複業」というのはパラレルキャリアとも呼ばれるものでございまして、文字どおり複数の仕事に並行して取り組んで自分のキャリアや経験を積んだりスキルアップを目指す働き方を指すもので、収入を増やすために本業とは別に副次的に働くという「副業」とは異なるものでございます。今年度の委員会においては、新たな事業展開の検討に合わせて、若者の参加等を促進するための効果的な手法などについて、各委員の皆様からご自身の活動状況や経験や知見に基づくご意見をいただくことで、今後の施策検討に生かしてまいりたいと考えております。なお、第1回目となる本日の委員会では、事務局から本市が取り組んでおります若者が活躍するまちづくり事業などについてご説明し、これに対して皆様それぞれのお立場から、日頃のお取り組みのご経験からのご意見、ご感想、参考事例のご紹介や、今回のテーマに関しての現状や課題についてお考えのことなど、幅広くご意見を賜れればと考えてございます。そして第2回目以降の委員会では、今年度予定しております若者に対するアンケートの実施内容や結果についてご意見をいただきたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

[高浦委員長]

ただいまの事務局の説明に対し、何か皆さんのはうから、こういう方向性でよろしいかどうか、ご意見、ご質問等はございますでしょうか。若者に焦点を当てることで、ほかの担い手の人たちを無視するわけではないという前提の下に、今までなかなか市民活動等、まちづくりに関わる機会が少なかった若者層をどういうふうに巻き込んでいくのかと、どういうほかの活動の担い手とのつなぎ方があるのかと。例えば、昨日の仙台市地域づくりパートナープロジェクト推進助成事業の審査会でも、大学生と町内会の人たちが一緒になって、いろんなまちの地域の課題を解決していくというところでまさに協働という在り方も見られましたので、決して何か排除するというわけではないことだと思っております。皆様のはうからご意見等を頂戴できればと思いますが、いかがでしょうか。

[小林委員]

資料1で、傍聴定員10名とありますが、公開するならもっと入れてもいいような気もするし、進行上10名以上が駄目なら非公開にして、後から内容だけ公開してもいいような気がしたので、何で10名という少ない数字なのかなというのと、もしいっぱい来た場合どうやって選ぶのかという素朴な疑問がありました。

[事務局（市民活動推進課長）]

傍聴定員の10名につきましては、これまでの委員会の開催実績を踏まえて10名とさせていただいたところでございますが、10名以上の方がいらっしゃった場合は臨機応変に対応させていただきたいというふうに考えているところでございます。また、会場のスペースの関係もございまして、一定程度の定員というのは設けさせていただいているところでございます。

[高浦委員長]

ぜひ傍聴される方であふれるくらいの委員会にできればと思っていますので、より活発な議論をしていきましょう。

[岩間委員]

これまでどうだったか教えていただきたいのですが、審議内容のところで、若者のまちづくりというのが頻出するなと感じました。私も日頃からもやもやするところなのですけれども、まちづくりって本当にいろんなジャンルがあるじゃないですか。学生と日頃接していると、例えば何かソーシャルビジネスを起こすといった領域に興味がある学生がすごく多いという実感があるんですけども、一方で、町内会のような守る仕事とかに興味がある学生は10人いたら1人会うか会わないかぐらいの実感です。これはこれまでの議論の中だと、どういうジャンルが多かったとか、もしくはこういうジャンルが弱かったから、

今後はこういうジャンルも審議していきたいとか、そういう方向性があるのでしょうか。

[事務局（市民活動推進課長）]

これまで若者の活躍するまちづくり事業ということで、おおむね18歳から30代の若い方々ということで、当然学生の方や社会人になられた方もご参加いただいているところでございます。その方々がまちづくりに参加したいのか、もしくはソーシャルビジネスを起業したいのかという部分につきましては、把握し切れていないところが現状でございます。

[高浦委員長]

佐々木委員の子供の支援やReRootsのように農業支援など、まちづくり自体も多様化している中で、いろんなサポートの活動分野があるのだろうなと思いますので、ぜひ多様な視点で色々な分野の若者支援につながるような議論ができるといいですね。

[石田委員]

前期の委員会にも参加していたので、協働まちづくり推進プラン2021の18ページ、19ページの事業一覧で、まちづくりが多様だというのは私も分かっていながら、どこに若者に関する事業が掲載されているかというのは議論しなかったので分からぬところもありますが、掲載されている事業以外でも若者の参画についての議論もあるでしょうし、掲載事業の中でも若者をどういうふうに巻き込んでいくかということもあるのかと思いました。

[高浦委員長]

プランの19ページの分野3に、今日もご説明いただく若者アワード等の事業事例なんかが挙がっているのかもしれませんけれども、事務局のほうからはいかがでしょうか。

[事務局（市民活動推進課長）]

プランの1ページ目をご覧いただきたいと思います。仙台市の協働まちづくりを進めるために、仙台市では条例と基本方針、それに基づく実施計画ということで、三本立ての体系にしておりまして、仙台市協働まちづくり推進プラン2021が実施計画に当たるものでございます。3ページ目では条例で定める市の基本的な施策3分野13項目を示しており、17ページ目ではこの基本施策を推進するうえで重視すべき視点を三つ掲げております。今回ご議論いただきます若者の活躍するまちづくり事業につきましては、分野3の多様な主体による活動の推進に関する事項に掲げている事業でございます。18ページ、19ページにこのプランの事業の一覧が載っておりますが、若者が活躍するまちづくり事業につきましては、34ページの①に、三つの個別事業で構成されている事業として掲載しております。

[高浦委員長]

既存の事業はあるのだけれども、さらにそこから次のステージといいますか、若者からの市への提案にとどまらず、その先の学生団体と町内会のコラボレーションとか、具体的な協働のところまでつながる支援のような新しい形に向けて深化させられたらしいなと思っております。もう既に具体的な中身の議論に入っているかとは思うのですが、進め方としてはこのような形で進めさせていただいてもよろしいでしょうか。

今回の議事録署名人については先ほどの資料1の運営ルールに従い、五十音順で石田委員にお願いしたいと思いますが、皆さんよろしいでしょうか。石田委員、よろしくお願ひしたいと思います。

#### (4) 若者が活躍するまちづくり事業について

[高浦委員長]

続きまして、議事(4)若者が活躍するまちづくり事業について、事務局から説明をお願いします。

[事務局(市民活動推進課長)]

資料3をご覧ください。まず初めに、先ほどもご説明申し上げましたが、若者が活躍するまちづくり事業は三つの個別事業で構成してございまして、これらを順にご説明申し上げます。初めに、仙台若者アワードについてです。

スライドの3ページ目をご覧ください。こちらは若者団体の社会貢献活動を表彰とともに、若者と企業などの多様な主体との連携による取り組みを促すなど、若者の社会参加の促進を目的として、コカ・コーラボトラーズジャパン株式会社様、一般社団法人ワカツク様と、本市が実行委員会を組織して実施しております。表彰部門と協働部門で構成しており、表彰部門では、社会貢献活動を行っている若者団体を公募し、公開プレゼン形式で審査表彰を行うものです。また協働部門では、企業様の参画を得えまして、その企業と協働してSDGs達成の取り組みを行う若者団体を、その活動プランの提案とともに募集いたしまして、企業とマッチングして一緒に取り組んでいくというものでございます。

スライド4ページ目には、昨年度の実績を掲載してございます。表彰部門のプレゼン審査は、例年ですとイベント形式で開催しておりましたが、昨今のコロナ禍もございまして、昨年度と一昨年度はオンライン形式での開催となりました。表彰部門につきましては8団体から応募があったところでございます。協働部門につきましては二つの企業様にご参画をいただきまして、若者団体との協働の取り組みが行われました。今年度は6月下旬から対象団体の募集を開始いたしまして、11月下旬に表彰部門の最終審査並びに協働部門の活動発表を予定しております。

スライド5ページ目をご覧ください。仙台まちづくり若者ラボについてです。こちらは若者が自ら自分ごととして関わるまちづくりのテーマを設定して、実践型プログラムに参加し、その成果を発信共有することで、主体的に動く若者などの発掘、育成を目指す取

り組みでございます。市内に居住、通勤通学する18歳からおおむね30歳の方の参加を募りまして、ワークショップ、フィールドワーク、最終報告を開催いたしまして、それらの活動には参加者と同世代の社会人の方がメンター役、相談や助言役となってサポートをするようにしてございます。またフィールドワークでは、参加者の皆さんがまちの特派員となって、まちに潜在する様々な人や取り組みなどを取材していくものでございます。

スライド6ページ目では、昨年度の発表チームをご紹介しておりますが、昨年度は33名の若者が参加し、六つのグループに分かれて活動いたしました。

スライド7ページ目をご覧ください。この若者ラボでは、グループで取材、探求したアイデアやアクションプランを報告会で発表することまでが一連のプログラムとなってございます。7月から11月までの5か月間でワークショップを4回行いまして、各回のワークショップの間に、フィールドワークとして各チームが設定したテーマに関連する取材活動を行います。

スライド8ページ目には今年度の実施案を記載しておりますが、昨年度からの主な変更点といたしましては、一つ目はオープンワークショップの開催でございます。昨年度の参加者アンケートの回答で市役所職員との交流を希望する声があったことも踏まえまして、初回のワークショップでは職員による各部署の取り組みの紹介や、職員との意見交換などの交流の機会を設けまして、テーマ設定の一助としてもらいたいと考えております。また、若者ラボへの参加にハードルの高さを感じていてもオープンワークショップを通してラボの雰囲気を感じ取っていただき、その後の参加も考えてもらえるようにしたいと考えてございます。二つ目はチームを超えた交流でございます。こちらも昨年度の参加者アンケートの声にあったものでございまして、昨年度はコロナ禍で開催できなかった中間報告会を開催し、ほかのチームとの意見交換など交流の機会を設けたいと考えてございます。今年度のスケジュールは昨年度とおおむね同じでございまして、7月にオープンワークショップ、10月に中間報告会、そして12月に最終報告会、そして年明け1月には若者ラボのOB、OGやまちづくり活動に参加しているグループなども交えた交流会を実施する予定しております。

スライド9ページ目をご覧ください。ユースチャレンジ！コラボプロジェクトでございます。こちらは私どもが別の事業として行っておりますNPOや企業等から地域課題等に本市と協働で取り組む事業提案を募集して実施する市民協働事業提案制度という事業を、提案を募集する団体を若者に特化して進めている事業でございます。若者にとって身近なまちづくりについての事業提案を募り、協働で取り組むことで、若者の発想を生かしたまちづくりを推進していくことを目的としたものです。内容といたしましては、実施体制のイメージの図にございますとおり、提案団体に対してサポート団体による伴走支援を行いながら、本市と協働で取り組むとともに、1事業あたり30万円を上限として事業負担金も交付するものでございます。

スライド10ページに、昨年度実施した二つの協働事業をご紹介しております。一つは広

瀬川の空間資源を生かしたプログラムの実施を通じて、広瀬川に親しむ市民を増やすということを目的としたミズベフェスタ事業というもの、もう一つは立町地区におけるコミュニティの活性化を目的とした、立町エリアにおけるコミュニティスペースの提供事業でございます。

続いて、スライド11ページ目をご覧ください。これまでの取り組みから見えてきた課題につきましては、これらは私ども行政サイドから見た課題認識とはなりますが、例えば若者ラボといった若者イベントや事業への参加の敷居が若者にとって低いとは言えないのではないか、また、アウトリーチ型を含む参加のきっかけづくりなどが必要ではないかと受け止めているところでございます。そのほかにも、団体同士の横のつながりを促す取り組みや事業に参加された団体の事業後の活動継続への支援、後押しがもっと必要ではないかなどといったことも課題として受け止めているところでございます。また、第4期の当委員会におきましても委員の皆様からご意見をいただきしております、若者がまちづくりに接する機会や関わりを増やしていくことの重要性や、若者と協働したいという地域やNPO側からの声を反映する場の必要性などについて、ご意見をいただいていたところでございます。

スライド12ページ目に移りまして、若者の意識に関して、国の調査結果も踏まえまして、今後新たな事業展開を検討するに当たっての着眼点の一つになるだろうと私どもが考えていることをご説明いたします。まちづくりに活躍する若者を増やしていくためには、まちづくりに興味があるけれども行動にまでは移せていない若者を巻き込んでいくことが重要と考えてございまして、そのためには、このスライドでご紹介しております若者の社会参加への意識に関する国の調査結果も踏まえまして、経験、体験というものが活躍する若者を増やすポイントではないかと考えているところでございます。

スライド13ページ目をご覧ください。これまでご説明した三つの事業が、まちづくりに興味があるが行動に移せていない若者、そしてまちづくりに参加する若者のどちらを主なターゲットにしているのか、事業を体系化したものでございます。まず、仙台まちづくり若者ラボは体験型の取り組みとして、行動に移せていない若者を主なターゲットにしておりますが、この若者ラボではフィールドワークやワークショップを通して練られたアクションプランを報告会で発表することまでが一連のプログラムとなっており、その後の活動には至っていない参加者グループも残念ながらございます。そういう若者をまちづくりに参加する若者へと後押しするような、赤色の点線で囲われた部分のような活動の継続を後押しする施策が必要ではないかと考えているところでございます。また、若者ラボは5か月間にわたるプログラムとなりますことから、もっと気軽に体験できるような施策が必要ではないかとも考えてございます。続いて、仙台若者アワードやユースチャレンジ！コラボプロジェクトにつきましては、まちづくりに参加する若者や既に参加している若者を主なターゲットとしており、参加条件が団体やグループに限られておりますことから、個人でも参加できる活躍の場を提供する施策が必要ではないかと考えているところでござい

ます。このような視点も一つとしながら、今後、若者の意識などを把握するアンケートや、若者の意見などをヒアリングするワークショップを通しまして、新たな施策を検討していきたいと考えているところでございます。

スライド14ページ目をご覧ください。アンケート及びワークショップのスケジュールの予定でございます。当委員会の審議の関係にも触れながらご説明申し上げますと、アンケートにつきましては、7月の第2回の当委員会にてアンケート内容にご意見をいただきまして、7月から8月にかけてアンケート調査の実施を予定しております。そして10月の第3回の委員会では、単純集計の内容を事務局からご提示いたしまして、ご意見をいただきたいと考えてございます。また、ワークショップの開催時期については、11月から2月の間で今後調整を行っていく予定です。これらのアンケート、ワークショップの調査結果報告は、この資料では年度内となってございますが、年明け2月の第4回委員会において、ワークショップの結果を含めた調査結果のご報告とともに、次年度の新たな施策案についてもご提示し、ご意見を頂戴できればと考えているところでございます。

[高浦委員長]

それでは残りの時間を使って、このテーマに基づいて、全ての委員の皆さんから一言以上頂戴できればと思っております。今、幾つかある事業をどういう方向に向けて進めていったらいいのかというところについて、実際のフィールドで課題を抱えた若者を地域とつないだり、農業支援といった活動をしていらっしゃる高橋委員のほうからご意見を頂戴できればと思っていますが、高橋委員いかがでしょうか。

[高橋委員]

アンケートで若者のニーズを拾ってアイデアを出していって、若者が主体性を持って活動できるものを考えることですが、今回の委員の中に若者と言われる方がいないなと思いました。例えば、この若者という定義がどの辺に値するのかというのにもよりますけれども、現役の大学生がここにいらっしゃると、その当事者性が高い意見が聞けたのではないかと思いますので、ゲストスピーカーのような形でお招きするというのも一つかなと思った次第です。あとは、SDGsの観点から言うと、元気がある大学生はこういった枠組みがなくてもみんな自主的に行動して市民活動をしたりコミットして、すごい起業家になる方々がいる一方で、二極化していると思うのですけども、困難を抱えている若者、特にコロナ禍以降心の不調を抱えている若者がすごく多くなっていることがあって、アウトリーチ型のようなフックがかかるような取り組みというのものが一つあったほうがいいのかなと。そういう若者がいるという、顔が見えないというか、なかなか私たちが出会わない若者が非常に多いのだということを、皆さんで意識できるといいのかなというふうに思っていました。誰も取り残さないということを入れていく中では、そういうことが必要かと思っています。一つの好事例で、大阪のNPO団体の取り組みなのですが、市営

住宅の入居者がご高齢者ばかりで団地の中の清掃活動などがなかなか管理できないということが起きている団地で、ひきこもりの方に移住促進事業で空き室に入っていただいて、その方々がアルバイトでまちの清掃活動をしたり、ご高齢者の方のサポートをするといった雇用の創出の事例があります。そういうことを鑑みると、誰かの役に立ちたいという若者が非常に実は多いのだということを根底に考えながら、少し敷居を下げるという意味でも、困難を抱えている方々が社会で活躍できる場もつくっていけるといいのではないかと思っています。

[高浦委員長]

多様な背景を抱えた若者がいる中で、高橋委員ご自身が進められていらっしゃるソーシャルファームのような発想といいますか、課題を抱えていても社会のために役立ち得る場ようなものをつくっていけたらいいですね。元気がある学生のみならずというところかなと思ってお聞きしました。あと、ゲストスピーカーとして学生団体等を呼んだりということも検討していきたいですね。

ボランティア、特に災害の場になってくると、若者の活動、マンパワーというのは注目されますけれども、ボランティアセンターの運営等で関わりを持たれている春委員、いかがでしょうか。

[春委員]

ボランティアの観点から言うと、コロナ禍前に本会で大学の教職員の方を迎えて意見交換をしたときには、まず学生が忙しいという話と、情報をどうやって学生に伝えたらいいのかというようなところが話題になっていました。今メールやSNSを使って発信しても情報量が多くてスルーされてしまうので、紙ベースに戻ったという大学もありました。コロナ禍になって、今年全部の大学に聞いたところ、もう授業が対面になっており、感染予防対策や学校に届出が必要なところもありますが、ボランティア活動についても制限をかけていないというお話を伺っていたところですが、オンライン等で講義を受けているので、学校に出てこない学生がいることもよく伺っています。学校に出て来ていない学生たちとどうやって活動しているのか、ここ2年でボランティア保険の大学生の加入率が非常に高かったReRootsさんに聞いたところ、やはり募集方法はSNSで、横のつながりを希望する学生たちが集まってきて活動しているようです。また、子ども食堂や災害関係など、学校が窓口だとなかなかセキュリティーが高くて、コロナ禍の中では非常に難しいところですが、学生で手を挙げる方々が非常に多かったり、SDGsについて考えている学生も多く、忙しいとは言いながら活動したいという声は非常に多いなというところがあります。ただ、そこをどうやって情報発信しながらその方々をつなげていくのか。あと、ボランティアを受入れる側の方々には本会でよく言うのですが、以前は日本だとボランティアイコール人力、若手の人たちに力仕事をしてほしいといったニーズのほうが高かったのです。ですが、

今の若者は、起業する人も非常に多くなっているということもあるのですが、やはり自分たちの考えが少しでも反映できる企画や運営に携わらせてもらえるということに非常にやりがいを感じています。頼まれたものをやるというのが得意な学生もいらっしゃると思いますが、やはりそうやって自分で考えるというようなところが非常に刺激になるようです。また、大学生が高校生に講話をして自分の活動を伝え、一緒にボランティア活動をすることもしているのですが、高校生の話を聞いて大学生はまた新たに自分のやっていることの認識を深めたり、さらにステップアップしようということを考える学生も多いような気がするので、どうそこにつなげていくのかというようなツール、仕組みづくり、情報発信とか、そういうものも工夫をしていくといいのかなというふうには思うところでございます。

[高浦委員長]

個人で参加できるような場づくりにもつながっていくようなヒントをいただいたように思います。先ほどお話に出たReRootsで以前代表された広瀬さんに話を伺う機会があったのですが、新歓の事業で一緒にゲームを樂しませんかといったサークル活動のノリで、必ずしも地域の農業支援という高い意識を持った学生ばかりではないけれども、皆で楽しく、孤立、孤独感を感じないような場をつくっていくというところから、間口を非常に広くされているとのことでした。そういう学生団体のノリも大事にしながら、連携して市の施策というものが動いていくといいのかなというふうに思ってお伺いしていました。

先ほどの企画とか運営に携わりたい学生も一方でいて、アントレプレナーシップの授業をすると教養課程の授業でも100人を超えるような状況だったり、また高校生もそういう大学のアントレプレナー教育を受けたいということで受講してもらったりとか、そんな取り組みも広がっていました。こうした高校生、学生を地域で巻き込むというところでは宮城大学のほうがより進んだお取り組みをされていると思うのですが、石田委員、いかがでしょうか。

[石田委員]

アントレプレナーのほうもそうなのですが、授業にはたくさんの学生が興味を持って入ってくるものの、その先の実行するというところになると、実はそうでもないところもあります。ただ、ここ5年ぐらいアントレプレナー教育をやっている中で、面白いと言うとちょっと表現が悪いかもしませんが、先ほど高橋委員からもお話があったように、自主的に動く学生はひとりでに動き始めるのですが、その次の層ぐらいで、せっかく大学に来たし何かしたいと思いながらもどこにアプローチをしたらいいのか分からない学生たちが、たきつけると結構ばっと動き始めて、サポセンやいろんなところでお世話になっています。たきつけても全然ヒットしない学生はとりあえず今は様子を見ているんですが、ただヒットする学生を何とか後押ししてあげたいなと思っています。仙台若者アワードのレポート

を見ると、例えば大学の授業やサークルをきっかけに出発したものでも、地域の受入れ団体と一緒にやっているものと、自分たち学生だけでやり始めているものと、二パターンあります。どっちもあっていいなと思いながらも、特に受入れ団体があると結構やりやすいというところもあります。我々は受入れ団体を毎回開拓していかないといけないので、その辺で手間取ったり、全部教員でハンドリングしないといけないと限界があるので、途中で我々もブレーキがかかってしまうこともあって、そういう意味では受入れ団体のリストがあったり、プラットフォームが仙台市にあって、そこに行けばいいとなると、我々ももう少し学生を送り出しやすいので、そのプラットフォームを運営してくれる団体があるといいのか分かりませんが、そういうところを日頃考えているところです。

[高浦委員長]

昨日の審査会でも、もともとはゼミの活動から生まれたとのことですが、その後学生自身で運営してもう10年くらいになるという仙台白百合女子大学の学生団体がいて、すばらしいなと思って聞いていました。いろんな関わり方を希望する学生にどうアプローチしていくのかという点は実際にフィールドで活躍されていらっしゃる団体にヒントがあるかもしれませんし、そして個人でも参加しやすいようなプラットフォームという、特に活動資金というところでご支援いただくようなものがあると大学としても送り出しやすい、連携もしやすいというふうに思っていますので、ぜひ若者層向けの協働事業の提案制度みたいなものがあるといいですね。ちょっとまだ荒削りであまり地域の課題を十分に把握できていないとか、学生目線の不十分さというのもあろうかと思いますが、そういう団体でも手を挙げやすいような、そしてプラスアップしていくような場というものができるといいのだろうなというふうに思っております。

日頃、若者との接点も多いかと思いますので岩間委員、いかがでしょうか。。

[岩間委員]

企画をするところまでは楽しくて、いざ実践になると、現地の地権者の方といざコミュニケーションしてみたら、めちゃくちゃ渋い調整になって実行に至らないとか、本当にあるあるだなと思っています。事業だから仕方ないんですけど、一つクリアしたら次に行って、これをクリアしたら次に行ってという階段状のやり方をせざるを得ないので、その進め方自体が昭和のキャリアアップのようで。今の若者のキャリア化というのは、階段を上っている途中でもっと面白いことに興味が出てきてしまって、違う方向に行ってみたら意外とギグな働き方でも生きていけてしまったみたいなことがすごくある、すごく多様な時代だと思うんですね。先ほどから話題に挙がっていますけれども、スポットライトを浴びる中心に立つ子だけではなくて、そういう子を応援はするよとか、当日マンパワーだけでいいんだったら手伝うよとか、そういう子たちの参画も促すような、隙間をどこかのポイントに入れてあげると、もう少し多様性が出るのかなということを感じました。応援はし

たいのだけれども時間がないという人もいっぱいいると思うので、例えば投げ銭制度をつくって発表会のときに応援する、お金出すから頑張ってという参画の仕方を促すとか、あとはハッシュタグで、1個隣に情報を渡すだけでいいからちょっとやってみようよという参画の仕方を促すとか、そういう方法も考えると、どうしても絞り込まれがちになってしまふプログラムが少し広がりを見せるんじゃないかなっていうことを思った次第です。

[高浦委員長]

若者ラボでも、ONE TOHOKUの皆さんのがメンター、指導相談役として伴走支援やほかの団体とのつなぎ役をしていますが、そういう少し後押ししてあげられるような、何かヒューマンサービス的なものもあってもいいですね。

STORIAさんも子供支援という分野で、いろんな意識の高さを持った学生がいらっしゃると思うんですけども、どういうふうに接していらっしゃいますでしょうか。よく企業ともつないで、プロボノの企業人ともつなぐというところも、いろいろと創意工夫されていらっしゃると思いますが、いかがでしょうか。

[佐々木副委員長]

私も社会起業家のメンターをしておりまして、ソーシャルビジネスというのは、社会人でも学生でも、今すごくニーズがあるなというのは肌感覚ですけれども、とても感じております。例えば、ソーシャル系の何か事業を立ち上げたいという方に関しては、フォローしなければいけないポイントというのが四つぐらいあるなと思っています。まずはこういったプログラムがあるということがきちんと届くように広報していくことです。あとは継続できるようなプロダクトを開発できるように伴走できるかといったことや、一步踏み出すために背中と一緒に押してあげながら伴走していくこと、最後はそれを継続していくために、いろんな事業ですからいろんな悩みがあるので、あなたの努力が足りないとかではなくて本当に心から寄り添って一緒にやっていくような、そういうタッチポイントを丁寧に継続し続けることが必要なのかなということを、これは若者でも社会人でも一緒だなということをすごく感じております。あと、高橋委員がおっしゃったようなソフトな関わりというか、例えばまちづくり、ギラギラしてやっていくぞという人だけじゃなくて、本当にまちのために何かしたいんだ、何かしたいけれども分からんんだという人たちの気持ちをちゃんと叶えられるような、そういう場所も環境も必要なのかなというふうなものを感じております。そこにすごく大事なのは関係性だというふうに言われているそうです。この間、地方の活性に携わっていらっしゃる信州大学の不破先生とお話をさせていただいたんですけども、若い方たちがまちづくりで何かしたいと思うのは、小さいときからのそのまちへの愛着みたいなところがすごく大事で、そこから何かできるか分からないけれども何かしたいんだという気持ちが生まれて、目の前に困っている人がいるから自分はそれをやっていこうみたいな、そういう流れになっていくというお話を聞きました

して、まさにそのとおりだなということを感じています。何かしたいと思ったときには、豊かな関係性、人間関係性があることがすごく大事なんじゃないかなというのを、私も現場でボランティアさんが長く携わってくださっているのは、やっぱり自分がここに戻ってくると自分の居場所になるという、だからこの町内のために、自分は違うところに住んでいるけれども何かしたいみたいなことを皆さんおっしゃってくださるんだなということをすごく感じました。また、例えば大学生になってから急に何かをするというのは実効性でもハードルが高いので、私は小学生の子供たちを対象に取り組んでいるんですけども、子供のときから失敗と成功を繰り返して、自己肯定感と自己効力感の土台を築いて、いざ成長したときに、失敗してもいいから一歩踏み出してみようということにつながっていくのかなということをすごく感じていますので、子供時代からそういうものがすごくあったらしいなっていうふうに思っております。

#### [高浦委員長]

地域のために何かしたいという思いをどう実現させていくのかということですね。鯖江市のほうで、一頃メディアで話題になりましたJK課という女子高生のグループで、高校生のまちづくりサミットを開いたり、いろんなアクションプランが生まれていましたが、女子高生に限らずそういう目玉となるような仮想上の行政上の組織みたいなものをつくって面白いかと思いますし、すごく話題性のあるようなものを仙台市独自の視点でつくれてもいいのかなと思いました。また、宮城県のプロボノのセミナーを拝見させてもらったときに、社会人何年目かの若い人たちが、NPOの活動、あるいは学生との関わりを通じてメンターとしてもまた成長する場であったりというところが面白いなというふうに思ってお伺いしておりました。先ほどの高橋委員の若者の定義をどうするかということもつながってくると思うんですけども、必ずしも高校生、学生だけに限らずいろんな層を視野に入れて議論できるといいのかと思いました。

#### [加藤委員]

先ほどから出ているとおり、若者に参画してもらうために、若者に対して情報をどうやって、どれだけ行き届けるかということを、ずっと課題に感じながら我々も取り組んでいるんですけども、やっぱり活動をしている方たちはどんどん出てきてくれるものの、その2番目、3番目にいる何かやりたいけれどもどうしたらよいかわからないといった人たちは情報を取りに来てくれないので、情報がなかなかそこに届かないというところで、学校を通したりしながら進めていますけれども、学校を通すと、今度は学校の中の制限もかかってきたりして、なかなか集まらないという葛藤があります。その中でも参加してくれる方たちが集まってくれると、いろいろ企画を考えたりするのは本当に得意なんだなというのは改めて感じてはいるのですけれども、その実行をするに当たって地域の巻き込み方が苦手だったりもします。これは、学生たちが巻き込むのが苦手じゃなくて、地域側のほう

もなかなか受入れ体制が整っていないという環境もまだあって、学生たちがお手伝いに行きますというと、人足でしかまだ使われていないというのが現状だと思うんですね。そうすると、今の学生たちは前向きに意欲を持って取り組もうとしているのに、それに対してなかなか思うようにできない、つまらない、行くのやめた、次行かないという流れも一部あったりとかというところで、私も商店街のいろいろなイベントを行ったりする中で、学生さんとの関わりがどうしても次につながるところまでなかなか持っていくってあげられないというところは、地域側の受皿の部分で、我々が若者に期待している部分と、地域が若者に期待している部分のギャップがあるのかなと最近感じています。地域のほうはどうちらかというと若者をどういうふうに使ったらいいかまだ分からぬ中で、じゃあ何を期待していくのか、そこを地域側もしっかりと考えなければならぬと思います。若者はどんどんいろんなことをやりたいので一発のイベントがすごく得意で、逆に継続性という部分は苦手なので、そういういろんなギャップを埋めていくものというのはこれからやっぱり必要になってくるのかなというのは感じています。長町で、コロナ前に中学生、高校生が集まって意見交換会をしたことがありましたけども、中学生たちが長町にあるものと言ったときに、商店街と答えたんですね。商店街を誇りにしている学生がいたというところが何かすごく印象に残っていて、高校生はモールとか答えるんですけど、中学生は商店街と答えたというところが、それだけやっぱり子供たちはまだ期待している、夢を描いている部分もあるといったところをどういうふうに生かしていくのかというのは、間に入っている我々もそうですし、もう一つ下の世代がどういうふうにこれをつないでいく土台をつくってあげるのかというのは、ちょっと大きな課題なのかなと。若者が土台をつくるというのはなかなか難しいので、そのベースをどれだけつくってあげて、次の若者が活躍しやすいようなベースをつくってあげるかというのは、非常に大きな意味あることだと最近感じています。

[高浦委員長]

地域の視点からということで、非常に貴重なご意見を頂戴したと思います。若者がふだん接する大人といいますか、地域社会となると、きっと商店街とかそういう場であって、ふだん買い物したりするという、それがまた誇りの意識にもつながっていくというところが、パートナーとして組む際の協働を進めていく上でのとても大事な場になっていくと思いました。

商店街というところで、庄子委員のお取り組みなんかも踏まえながら、またお話をつないでいければと思いますが、いかがでしょうか。

[庄子委員]

まずやっぱり多様化しているので、すごくやりたいという人はつながりやすいんですけども、そうじゃない人といかにつながるかということと、やりたいときにどこに声をかけ

けていいのかといったことは常に課題になっていて、大学に言っても、学生と意外とつながっているようでつながっていなかったりするので。そういう中で、荒町商店街では荒町サポーターズクラブというのがあって、お金を払って会員になった高校生や若い会社員の方が、荒町のおみこしとか、イベントがあるときにサポートしに来てくれます。おみこしを担ぐ前に焼肉パーティーみたいなものを開いて、当日来るだけじゃなくて、事前に顔を知った関係をつくっておくことで当日来たときにもっと深く関われたりするので、人と話したりするのが苦手だった高校生が社会に出てコミュニケーションを取れるようになったりもしています。お祭りや七夕づくりなどで学生さんと関わったりとか、あとは小学校では回文団扇づくりという荒町の歴史にちなんだうちわづくりを子供たちと一緒にするのですが、うちのお客さんの大学生や地域の大人にもお声がけをして、事前にうちわづくり体験をしてもらったうえで小学校に教えにいくとか、そういう部分で子供たちと関わる機会もつくることで、子供たちが荒町を誇りに思う気持ちを持ってくれたりとか。あとは、子まもりプロジェクトで、ほかの団体と関わることで、商店街だけではちょっと苦手な部分と得意な部分があるんですけども、児童館だったり、市民センターだったり、東北学院大学だったり、それぞれの団体と組むことで、それぞれの強みを生かしてケアできたりとか、その中に学生にも入ってもらって団体とつないだりもできるのかなということを今実践しています。大きいくくりになると問題も多くなるので、荒町界隈にエリアを絞った中で、連携しながらみんなで一緒に経験値を高めていくことができるんじゃないかなと思って、今実際に継続して取り組んでいるところです。

#### [高浦委員長]

商店街がつなぎ役となって若者層と地域のいろんな各セクターをつないでいって、それが地域の課題解決にもなったり、またまちへの誇りの意識の向上につながったりという、その自然な関わりで、それこそ焼肉イベントからでもいいから地域とのつながりが生まれていって、そして継続性も出てくるとなおよろしいのかなと思います。

傳野委員の地域では、パパママ世代を含めて、地域の皆さんが高いイベントに関わっていらっしゃるというのを以前からお伺いしていますけれども、改めていかがでしょうか。そういう仕掛けづくりという点では。

#### [傳野委員]

難しい問題が多いのかなと思ったのですが、我々の取り組みについて少しだけご紹介させていただきます。私はパークタウンにある五つの町内会から選ばれて高森東小学校区の連合会長をしておりますが、平成20年につくったパークタウン自治会町内会連絡協議会の中で、これからビジョン協議会というものを宮城大学や企業、町内会全部で組織しているのですが、その方々が宮城大学に行き来ができるようにしてくれたのが西垣先生でした。高森六丁目に宮城大学の先生や職員の宿舎があつたり、地域連携センター長とも仲よしな

んですが、今コロナで休んでいますけれども、毎年12月に宮城大学でベートーベンの第九の演奏会をやっていて、その第九を歌うために合唱団に宮城大学や仙台白百合学園高校の学生と大人が100人ぐらい加わって、大合唱団を作るといった取り組みがきっかけだったんです。これからビジョン協議会では、各連合の中に大きな公園があるのですが、地元では管理が難しいので、小学生のスポーツ少年団を交えて全員で落ち葉を拾おうということを、皆さんのがんから考え出して11月に実施する取り組みなどをしています。

[高浦委員長]

町ぐるみで若い人も住民の皆さんもそういうことができるような場をつくっていらっしゃって、一つ一つの歴史もとても興味深いなと思いました。

まちづくり、地域づくりというお話でありましたけれども、地域の環境問題に若者が関わるきっかけづくりといった視点では、小林委員いかがでしょうか。

[小林委員]

皆さんの意見を聞いたりして、まず今日最初に思ったのは、女性活躍などもそうですが、この若者活躍も意外とその主体である若者に問題があるわけではなくて、受入れ側に問題があつたりするケースが多いんです。これは環境の活動でも一緒で、学生とよく活動するのですが、一生懸命振って学生たちに話をしてもうおうとしてもなかなか意見を言ってくれなくて、個別に話を聞くと、言っても全部否定されてしまうから、という声を聽きます。でも、よくよく話を聞くと、それが理不尽だとは思っているわけではなくて、要するに自分たちの意見は未熟でさんは経験豊富なので、やっぱり気づくところがいっぱいあって、何か言うと、でもこうしたほうがいいよね、それやったけれども駄目だったんだよと言われてしまうと、全部納得してしまうんだと。だから何も言えなくなってしまって、やっぱり聞くだけになってしまいうといふ話だったんですね。だから、町内会や商店街などの受入れ側に対するセミナーとか、教育とか、そんなことも事業の中に入れていったほうがいいんじゃないのかなというのはちょっと思っています。それから、資料に取り上げられている方などもすばらしいなと本当に思うんですけども、こういうすばらしいことをやっている人は、取り上げようが取り上げまいが、やっぱりやるんですよね。だから、そういう人たちを発掘することも大事なんですけれども、そういうことをできない人とか、やらない人が参加する場づくりというのがすごく重要になってきて、そこをどうやって広げていくかと。お金を投資する事業の中ではちょっと難しいのかもしれないんですけども、ただ集まって話を聞くだけとか、何となく興味ある人がただしやべるだけみたいな場づくりとか、そういう本当にハードル低くして、取りあえず誰でも来ていいよという、そういうものも並行して行っていくと、意外と町内会ってハードル高くないんだとか、意外と商店街は面白い話ができるんだとかと気づく人もいると思うので、もうちょっとそういう視野を広げた活動があってもいいのかなというふうに思います。

[高浦委員長]

若者の居場所づくりの支援事業と、こうした地域づくりというのが、つながっていくといいなというふうに思ってお伺いしていました。また、加藤委員と同じような問題意識ということでお伺いいたしましたけれども、受入れ側に対しても傾聴のセミナーとか、そういういろいろな多世代たちが分かり合えるような、そういう場もつくっていく必要があるなというふうに改めて思いました。

これまでの議論を踏まえていただいても、あるいは独自のお考えでも結構ですし、ぜひ市民のお立場から、佐伯委員お願いします。

[佐伯委員]

まず去年の若者アワード2021の協働部門にあるお茶の新しい文化という取り組みがすごく面白いなと思いました、この後、継続しているのか大変興味を持ちました。それから、若者の定義というと今回は18歳から30歳代となっていますけれども、子供のときから生まれ育った仙台にいる方と、大学生や社会人になって仙台に来られた方では、まちづくりへの思いの度合いが違って、その辺が継続性があるのかないのかということになるのかなと思います。今現在、私も町内会の活動をしている中で、小中学生を取り込みたいということは行っていたんですけども、コロナ禍で学校のほうであまりオーケーが出ないようなこともあって、以前でしたら例えば夏休みに親子で一緒に町内会の人と草むしりをするとか、何か関わりを持って地域を知ってもらうというような取り組みがいろいろあったんですけども、制約があって今できないのがちょっと残念だなと思っています。そういう小さいときからその地域を知って愛着を持つ、まちに対する関心を持つてもらうということが、すごい土台になるんじゃないかなと思います。あと、仙台に来た方はどうして仙台を選んだのか。それで、仙台に思っていたイメージと実際来てみてどうだったのかというようなことを、もしアンケートで取れるのでしたら、そういうところから何かまた違うことが見えてくるんじゃないかなというふうに感じています。子供、年寄りだけじゃなくて、ほかから来た方も、みんな居場所を求めてまちづくりに取り組むんじゃないかなと思いますので、その辺を何らかの形にできるような、こういう催しの継続性を求めていきたいというふうに思っております。

[高浦委員長]

生粋の仙台っ子でも、よそ者であっても、共にいろんな思いを共有できるような居場所があるということがとても大事ですね。それが本当のコミュニティだと思います。お茶の井ヶ田さんも関わっていらっしゃったお茶文化モデルにご関心をお持ちだということですが、この取り組みは今も継続されていますでしょうか。

[事務局（市民活動推進課長）]

この協働部門のお茶の井ヶ田様におかれましては、非常にご理解いただきしております、今年度につきましても、この医学生の団体ariと、この図書館を継続してやるというようなお話を聞いております。昨年度につきましては、図書館の設置ということを目標にしておりまして、実際、店舗に本を集めて置いているんですけども、今後につきましては、実際この医学生もこの場所に行って住民の方と交流もできるようなことも視野に入れながら、今年度、継続していくというふうにお話を聞いております。

[高浦委員長]

お茶の井ヶ田さんは、SDGsに関心を持って常日頃お取り組みされていらっしゃる企業さんですけども、ぜひ引き続き貢献いただけたとありがとうございます。四方よし大賞とか、そういった経済局絡みでも、いろんな頑張っている企業を応援いただいて、こういう協働部門でぜひ参画してもいいよという事業者を増やすというのも大事な課題かと思います。

大分お時間になってまいりました。一人一人に十分なご意見を頂戴するお時間がなかつたかもしれませんけれども、多様なご意見をお伺いできてよかったです。

## 6 その他

[高浦委員長]

最後に、次第6その他ですが、事務局からは特にないとお伺いしていますが、委員の皆さんから何かございますでしょうか。また、終わった後でもいろいろと意見交換、情報交換をさせていただきたいというふうに思っておりますが、特にこの場でなければ、以上で本日の協議事項全て終了とさせていただきます。円滑な議事進行にご協力いただきましてありがとうございました。では、進行を事務局にお返しいたします。

## 7 閉会

[事務局（市民活動推進係長）]

高浦委員長、ありがとうございました。

以上をもちまして、令和4年度第1回仙台市協働まちづくり推進委員会を閉会いたします。次回は7月に開催を予定しております。本日はお疲れさまでございました。一了

〈議事録署名人〉

高浦 康有  
[委員長]

石田祐  
[署名人]

